

韓国 PBL 研修感想
1MD09009G 井上智博

ビートルに揺られ訪れた韓国、今回の研修は、お恥ずかしながらウイルス学の追試験のために三日目からという中途半端なものになってしまいましたが、それにしても、PBL、医学英語、スキーマ、勉強のみならず韓国語、韓国人、文化、流行、得られたものがあまりにいっぱいすぎてこの紙面に載せられないほどで、それはそれは実に有意義なものでありました。ざっと全体振り返りながら、特に関心の大きかったものをいくつか絞って、振り返ってみたいと思います。

初日に訪れたヘウンデ病院は、新しい事もあって、検査室が整然と並んでいたことが印象的でした。これは非常に大切な事だと思います。そうでなければ患者さんは、自分が受ける検査の部屋を探すだけでくたびれてしまいます。ムン先生から説明を受けながら連れられた道中で、授業で聞いたことのある検査のほとんどが目に入ってきました。全面的に電子カルテを導入しているとの事でしたので、それと相成って迅速な診断、治療が可能なのでしょう。ICU は非常に開けた大きな空間にあって、広く見渡せて清潔な感じでした。内科と外科に分かれていたので、総ベッド数は相当なものでしょう。病棟で、あそこの二人を見てご覧と言われ、見ると熱心に画面を見ている若いお医者さんと、画面にペン指図している高齢のお医者さんがいました。それは学生さんと教授が一对一で勉強をするという韓国におけるいわゆるポリクリの様子でした。一对多の形式よりも効率は分かりませんが、濃密に指導を受けられる事でしょう。ムン先生、石先生から、こっちの病院において、魅力的でしょう、とお誘いを受けたときには、正直な話、いいかもしれないと思いました。ただ、コミュニケーション手段が英語になるため、よほどの訓練を積んでいかないと、いけないことでしょう。

翌日から本来の目的の PBL が始まりました。毎回各 PBL でテーマが決められており、僕らが訪れた週は嘔吐、傾眠、高ナトリウム血症の三つがあげられているようでした。というのも、日本での追試のために PBL への参加が三回のうち二回目からになってしまったため、白板、他の PBL 参加者の話から流れを汲む必要があったからです。授業の内容は、生徒同士で話し合い、どの検査が必要かの意見を出し合った上で、その検査の結果を担当の教授に聞く。しかし、

その検査の仕組み、その検査の必要性を生徒が説明しなければ、教授はその検査結果を教えてくださいません。そして、分からないものはその場でテキスト読み、勉強する。日本ですと、まず、病名ありきで検査項目が羅列された教科書を眺め、あーこうなんだなーと納得して、試験に臨めばあれ、どんなだったかなと毎回反省するところでしたが、このように考えを巡らせた後なら、試験にもスムーズにアウトプットできるでしょう。PBL 自体は総合医学で選択することができますが、時間数も少なく、他の講座を選んだため、受ける事ができませんでした。体系的な学習のためには、もう少し積極的に導入されてもいいかもしれないと思いました。こうして検査の結果を手に入れてから、原因の追求に入ります。この段階では、調べついたキーワードを線でつないで“スキーマ”を白板に書いていきます。このスキーマは、日本の教育にはほとんど導入されていないもので、とても関心の高いものでした。キーワードを優先度順で結んでいく、いわゆる樹形図で、三回の PBL の後の発表会では、各グループ、このスキーマを作り、それをスライド一枚として、自分たちで行き着いた答えを発表するので、スキーマはいわば、PBL の肝ともいえるものでした。研修後、石先生から、今回の研修で、知りたい事感想があるならば自由に言いなさいと言われたので、僕はスキーマについて聞かせてもらいました。先生曰く、臨床場において、持っている知識と実際の状況、検査結果を頭の中で迅速に結びつけるため、現在のインジェ大学学長の先生の指導の下導入されたもの、とのことでした。ともすればインデックスとして溜め込まれてしまう知識を、もっとニューラルな連続性を持たせれば、引き出すのも関連づけるのも、比較的容易になる事でしょう。このスキーマは、日本で実践しようと思った事の一つでした。

毎日授業の後には、韓国の学生たちが昼食、夕食に誘ってくれて、多くの事を話し合いました。当然、今回の研修の目的は PBL に参加する事でしたが、このふれあいは今回の研修での収穫のかなりの割合を占めると言っても過言ではありませんでした。韓国の学生が食べるものを食べ、飲むものを飲み、お互い知りたい事を聞いて知る。韓国の学生たちはとても好奇心が強く、また英語を駆使して積極的に僕たちに話しかけてくれました。授業の時もいつも、なぜそんなに英語をうまくはなせるのかと尋ねたところ、韓国には韓国語に訳された教科書が無く、あったとしてもそれは大学がオリジナルで作成したものだという事、そのため、韓国の学生は、英語で書かれた教科書を読んで勉強するよ

りほかは無、という事を教えてもらいました。日本には、日本語で書かれた教科書があり、それをもとに勉強する事ができます。これは非常に恵まれた環境であるという事。そして、例えその様な環境がなくとも、英語を勉強すれば医学は学べるという事を、韓国で、それも学生の交流の場で知る事ができました。非常にラッキーなことです。加えて、そんなブライトな学生たちと知り合い、連絡を取り合う仲になれた事も、とてもラッキーな事だと思います。これからもこの関係を続けて、お互い行き来していきたいです。

スケジュール帳で見返すと実に短いPBL研修でしたが、一日一日を振り返ると、あれ、この日、こんな事まで知ったのだっけ、と、内容が濃かった事に改めて気づかされます。この五日間は、間違いなく有意義だったと言えます。これからの日本での勉強、ひいては日々の生活の中で今回韓国のインジェ大学で学んできた、1 スキーマを取り入れる、2 授業の内容を体系的、ニューラルにまとめる、3 英語での医学勉強及び英語の勉強を始める、この三つから、まずは始め、続けていきます。それが、今回この研修を企画して下さった康先生、現地で支援して下さった石先生、受け入れてくれたインジェ大学の先生方、学長先生、理事長先生、同窓会の先輩方、インジェ大学の学生たちへの、最大の恩返しだと思います。改めて、感謝いたします。